

National Institute of Technology, Hiroshima College Library

図書館だより

第62号 令和8年 2月10日

独立行政法人国立高等専門学校機構

広島商船高等専門学校



— 目次 —

巻頭言

○インフレ社会に思うこと 図書館長 澤田 大吾 P.2

寄稿 <新任教員>

○数学と私 流通情報工学学科 岡島 宏樹 P.3

○「グレートギャツビー」 アメリカン・ドリームの光と影 商船学科 山泉 凌 P.4

○「本って読んで何になるん？」 図書係 永友 恵 P.5

○トピックス 本の紹介・編集後記 P.6

巻頭言

インフレ社会に思うこと

図書館長 澤田 大吾

この数年、日本はデフレ社会から抜け出し、インフレ社会に入ったようです。金利も上昇し、やっとバブル崩壊後のゼロ金利からも脱却するようです。株価も過去経験をしたことがないような最高値をつけています。バブルを経験している世代は、またはじけると言っていますが、日本企業の力は1990年代に比較してもかなり強くなっています。まして30年間日本の株価は1万~3万前後の平均株価を行ったり来たりしていただけなので、これから数年は、世界並みの上昇カーブを描くと予想されています。

しかし、日本ではお金儲けの話は教育界ではタブーとされていたため、授業で金儲けの話など言えませんでした。やっと、10年くらい前から金融教育が文部科学省を推奨し始めたのですが、ほとんどの教員がその対応ができませんでした。今でも、金融教育は高校などでは、家庭科など実技系の授業で行うことが多いようです。

私の専門分野はアメリカ政治学(政治史)でした。30年前、本校に赴任が決まった時、経済分野は高校教科書レベルしか理解していなかったもので、サムエルソンのミクロ経済学とマクロ経済学を徹底的に頭に入れた記憶があります。しかし、サムエルソンの経済学など、専門以外の人を読んでもなかなか理解できるものではありません。難しい内容を砕いて簡単に説明するにはどうしたらいいのか? いつも考えていました。また、金融論を理解するために、実際に自分で株を購入し投資信託などを行いました。というか、金融論などと言いながら、いかにお金を増やしていくのか? そんなことを30年前から考えていました。

銀行にためても金利は0.01%以下、利息などほとんどない中で投資信託の利益などは桁が違っていたのです。投資信託は、最近ではNISA制度を政府が率先しているので馴染みのある言葉だと思えます。

昔、私が「株を買った」なんて言っていたら、親から「まじめに生きていない」など罪人扱いをされていたこともあります。日本では、お金は汗水ながして働いて稼ぎ、それを貯蓄することが美徳のようです。私は、「この考え自体が人間はお金に支配されている」と思っていました。もちろん犯罪行為はアウトですが、決まったルールの中で経済活動は、自己責任のもとに行ってもよいのではないのか? など胸のうちにもやもやしながら投資をしていました。

昨年、『きみのお金は誰のため』という本を読みました。久しぶりにお金に関する本で、心がスツとする内容でした。著者の田内学氏は、東京大学大学院を終了後、ゴールドマン・サックス証券でトレーダー業務に携わり、日本銀行の金利指標改革にも携わった人です。金融の最前線を経験した人物が、金融教育家として活躍しています。

著者は、本の中で3つのことを述べています。一つにお金自体に価値はなく、人が信じているから機能していること。二つ目に、問題を解決するのはお金そのものではなく、誰かの労働であること。最後に、社会全体で貯めこむのではなく、循環させることで未来が豊かになる。そして、一人の人間が豊かになるのではなく、社会全体が豊かになることが大切であると。お金を利益のための道具ではなく、社会とつながる仕組みとして捉えることの大切さを述べています。ぜひ読んでみてください。



◆◆◆ 寄稿 - 教職員 - ◆◆◆

数学と私

流通情報工学科 岡島 宏樹

今でこそ数学の研究を行っているが、中学生の私はさして数学に興味はなかった。確かに、数学は嫌いではなかったし、苦手でもなかったが、単純に興味がなかったのである。その頃の私にとって、数学は単なる無機質な一科目にすぎなかった。

夏休み直前、近くの本屋では読書感想文のための課題図書や、名作と呼ばれる本が特集されていた。私はその中から、1冊の文庫本を手にとった。特に理由は覚えていない。本のカバーの鮮やかな黄色に目を引かれたのかもしれないし、表紙に描かれた2つの三角フラスコのようなものに気をとられていたからかもしれない。とにかく、中学生の私はこの本『数学物語』を読んでもみようと思ってしまったのである。これが、私が数学の魅力に取り憑かれた原因であり、めったに振り向いてはくれない数学への片思いの始まりである。(たまに振り向いて微笑んでくれるところがまた憎く、そのたびに私は懲りもせず期待してしまうのだが...)

さて、私の数学との出会いや惚気話(?)はこのあたりでやめて、ここでは紹介したい本『数学物語』の話をしていこう。著者は矢野健太郎先生であり、この方は数学者でもある。大衆向けの数学の啓蒙書やエッセイ集のような本から、数学の初学者や大学生向けの専門書・テキストまで多くの本を執筆している。私も学生時代勉強に使った本の中に、矢野健太郎先生の書かれた本



があり、そこで初めてすごい先生であることを知った。こんなすごい先生の書く数学の本なら、さぞ硬い文章で難しくて難解な式が書かれているのだろうと思うかもしれないが、そんなことはない。この本に書かれていることはまさにタイトル通り「数学の物語」である。例えるなら、主人公である数学が偉大な学問になるまでの物語である。(まあ、これは言い過ぎかもしれない)

数学の物語といっても、その始まりは数字の誕生まで遡る。我々が当たり前のように使っている数字も最初から存在していたわけではなく、物を数えるところから数字が生まれた。その数え方によって、5区切りだったり、10区切りだったりという考え方が生まれたのである。数字が生まれただけでは、現代の数学のように発展はしない。そこには、エジプトやバビロニアなどの文明や国家の発展とともに数学も発展していった歴史がある。もちろん、数学の発展には多くの偉大な数学者も関わっている。ピタゴラスやパスカル、ニュートン、アルキメデスなど、皆さんがよく知る数学者が登場する。この本では、彼らのおもしろいエピソードを交えながら、数学の発展の様子が分かりやすく語られている。

この本を読んだからといって、数学の成績が上がることはないだろう。しかし、数学の授業が少し楽しく感じられるかもしれない。私のように片思いとまではいかないが、数学の魅力に気づいてくれると嬉しく思う。

「グレートギャツビー」 アメリカン・ドリームの光と影

商船学科 山泉 凌

アメリカン・ドリームという言葉、みなさんは聞いたことがありますか。これは、アメリカ合衆国における成功の象徴的な概念であり、与えられた機会を最大限に活かし、勤勉さと努力によって成果をつかみ取るという考え方を指します。しかし一方で、そもそも“成功”とは何なのか、考えたことがあるでしょうか。

今回ご紹介するのは、野崎孝による訳の**F・スコット・フィッツジェラルド**の代表作『**グレート・ギャツビー**』です。第一次世界大戦後、アメリカが繁栄の絶頂にあった1920年代を舞台に、豪華なパーティーと華やかな社交界のきらめきの中で、“夢を追い続けることの美しさ”、その裏に潜む悲劇を描いた名作です。私自身、学生時代にこの作品を読み、夢を信じることの尊さと、現実の重さに心を揺さぶられたことを今でも覚えています。

本書の語り手であるニック・キャラウェイは、ニューヨーク郊外に引っ越した先で、毎夜のように豪華な宴を開く大富豪ジェイ・ギャツビーと出会います。ギャツビーは上流社会の憧れの的でありながら、その素顔を誰も知らない謎に包まれた人物です。彼が派手な生活を送る理由はただひとつ、かつて愛しながらも離れてしまった女性デイジーと再会するという、揺るぎない夢のためでした。

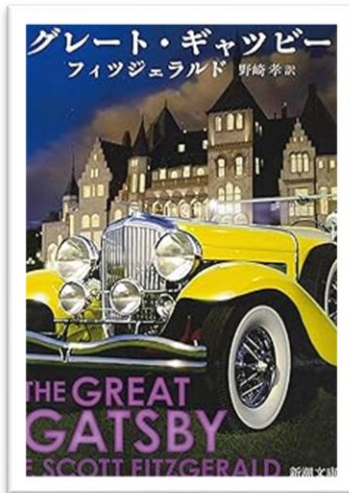
ギャツビーは、現実がどれほど厳しくとも、ひたむきに理想を追い続けます。その姿には、若さゆえの危うさと、夢に懸ける情熱の輝きが同時に宿っています。アメリカ文学ならではの文化的背景や価値観、日本人とは

異なる感性に触れられる点も、本書の大きな魅力です。

また、作品全体に漂う華やかさと孤独の対比も印象深いものです。豪華なパーティーの喧騒、まばゆい富、軽やかに踊る人々、その裏側には、どれだけ望んでも手に入らないものが静かに横たわっています。ギャツビーが追い求めた“緑の光”は、未来への希望であると同時に、決して届かない理想の象徴でもありました。

『グレート・ギャツビー』は、約100年もの間、読み継がれてきた古典でありながら、現代の私たちにも深く響くテーマをもち続けています。夢を追うことの意味、過去への執着、そして希望の行方、これらはどの時代でも普遍的な問いであり、読む人それぞれに異なる余韻を残してくれるはずです。

近年、“ワークライフバランス”という考え方が浸透し、働き方や生き方の多様性が広がりつつあります。その一方で、将来に夢を持たず、どこか悲観的になってしまう若者が増えているようにも感じます。みなさんは、「成功」や「夢」をどのように思い描いているでしょうか。『グレート・ギャツビー』は、夢を追い続けることの美しさを教えてくれる一方で、過去への執着が時に人を誤った道へ導く危うさも示してくれる物語です。この一冊を通して、夢を抱く力強さと、その影に潜む危険の両方を感じてもらい、“自分にとっての成功とは何か”“夢とは何か”を考えるきっかけにしていただければ嬉しく思います。



と、いわれたことがあります。おそらく小学生か中学生の頃、クラスメイトから聞かれた質問でした。当時の私の平均読書量はひと月百冊でしたから、そりゃ聞きたくなる人もいるでしょう。「勉強なんかして何になるの？」「なんで学校行かなきゃいけないの？」とか、そんな疑問を抱いたり、あるいは口に出して先生を困らせたりするお年頃だったわけですが、それからずいぶん時間は経って、気づけば私はおとなになっていたのです。本を読んだら何になるのか、むしろ答えて良いお年頃なのでは？と気づき、ちょっと考えてみることにしました。

運よく就職が叶い、ある程度年数が経つと、それなりに責任のある立場になることがあります。「その部署でこの仕事をお願いしてもいいですか」と聞かれたり、「今、ここの組織全体でこんな問題に取り組んだりしなければならぬのですが、あなたの部署ではどのような改善ができますか」と問われて、答える機会はどんどん増えていきます。あるいは、いつか答える回答のために、日々大量の情報を受け取り、読んで理解し、備える必要があります。答える際は、メールか文書か、あるいは対面で口頭になるかもしれません。

職業に関する知識は、業務に取り組んでいけばある程度身に付きます。文書やメールの作法は、日々自分が受け取るものを意識して確認しながら修得することになるでしょう。先輩や上長が、目上の人やお客様にどうふるまうかで、いつか自分がその立場になった時の参考になるかもしれません。

けれど、それらはあくまで手本、あるいはフォーマットなのです。もちろん、たくさんのフォーマットを自分の中のフォルダに集めるのは大事なことです。周りのフォローもなく自分ひとりでそのポジション担当として話すとき、また文書やメールを書くことになったとき、覚えているお手本を思い浮かべても、最終的に自分の口から出るのは、あるいはパソコンに打ち込むことができるのは、自分自身が持っていることばと文章センスだけなのです。自分で選択したフォーマットに、データのように自分のことばを流し込み、そうして職員として業務をこなしているように思うのです。

本は、多くの人の手を経て完成するものです。日々ことばに非常な注意を払う著者はもちろん、第三者による校正等によってより洗練された文章と情報となり、本の形となって届きます(校正システムも色々なのですが)。読書によって一定量の文章の読解をこなし、情報を受け取っておいたことは、今の私が図書館職員として学生の皆さんに、先生方に、職員の皆さんに説明したり連携したりする中で、私を助けてくれているもののひとつであり、私同様、たくさんの人にとっても助けになるものだと思います(今でも失敗はありますが、「たぶん十分な語彙は私の中にある！ 原因はそれを使い切れない知性が性格かその辺りのせい！」と割り切って立ち直っています)。

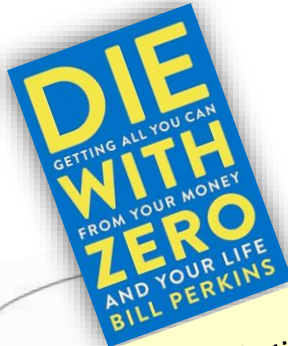
無理に読んで嫌いになるのもよろしくありませんが、時間が使える学生のうちに読書に取り組んでみることはとってもおすすめです。立派な本でなくても良いのです。念のため、ただし確信をもってお伝えしておきますが、ひと月百冊など目指す必要は全くありません。読みたいものを無理なく読んで、楽しい範囲内でたくさんの文章を浴びてみてください。

ところで、社会人になって私が驚いたことのひとつに、「大組織のトップが理解しなければならない情報の大量さ」があります。何か対処しなければならないときに提示される情報量、またそのポジションだから定期的に寄せられる情報量、わりととんでもないです。偉い人が学生だった頃、国語が得意だったかどうか少々気になるころですが、国語の点数に反映されていなかったとしても、「読書」によって鍛えられる「大量の文字情報を理解する」スキルには秀でている人が多かったんじゃないかしら、と推測しています。偉くなりたいその皆さん、今から図書館の本でトレーニング、いかがでしょうか？

読書の良さをほんの少々、お伝えするためにここまでの紙面を必要としました。他にも素敵なお話は、たくさん！あるのですが、うんざりする文章量にしかならないことが、もう目に見えていますね。ここで打ち止めといたしましょう。



新刊入荷
のお知らせ



DIE WITH ZERO……ビル・パーキンス 著

限りある人生でお金と時間を最大限に
活用するためには？
人生が豊かになりすぎる究極のルール!!
これから人生を歩き始めるみなさんに



成瀬は都を駆け抜ける……宮嶋未奈 著

待望の成瀬シリーズ第3弾!!
人の目を気にせず、自分の信じた道を
突き進む成瀬の大学生活、どうなる？
1作品目、2作品目も併せて読むとより
楽しい。シリーズついに最終章!!

このほかにも多数新刊が入っております

Netflixでも配信中の
デスゲーム×明治時代のバトルロワイヤル
黒幕はまさかの……1~4巻まで一気に
読める作品です!!

イクサガミ……今村翔吾 著



各学科の先生方にお選びいただいた本がたくさん入ってきています。
各学科ごとにコーナーを分けています。先生方が皆さんに読んでみて
ほしい本や専門書、また各学科界隈の話題本などが入ってきています。
もちろん館内でゆっくり読んでいただいても、構いません。
普段は本を読む習慣がない人も、ぜひ自分の興味のある分野の本から
楽しんでみてはいかがでしょうか。

編集後記



- ✿ 新採用の先生方2名から、ご寄稿いただきました。
ご協力ありがとうございます。新刊で入手できるものは後日推薦図書として
展示させていただきます。
- ✿ 今後とも図書館をご利用いただけるように、読書に親しんでもらうことを
目的に、令和7年も「図書館だより」を発行いたします。
- ✿ 図書館の本について、使い方について、質問や要望がありましたら、ぜひ
図書館職員にご相談ください。
- ◆ 編集発行：図書委員会(令和7年度)：澤田大吾(図書館長・一般教科)
清田耕司(商船学科)・風呂本武典(流通情報工学科)・後藤田和(一般教科)
豊嶋奏多(電子制御工学科)
- ◆ 〒725-0231 広島県豊田郡大崎上島町東野 427-1
TEL:0846-67-3007
- ◆ HP:<https://www.hiroshima-cmt.ac.jp/facility/lib.html>